

『のぼうの城』

2012年／日本／犬童一心、樋口真嗣 監督作品

理と情念

会員 中尾田 隆 (64 期)

戦国末期、豊臣秀吉による小田原北条家への戦が行われた。「のぼうの城」は、この中の一つ忍城攻めを舞台に、「のぼう」こと成田長親とそれを取り巻く人々の人間模様を描いた映画である。

「のぼう」は、図体が大きいだけで武将としての能力が低いくのぼうであった。しかし彼には人を引き付ける愛嬌があったので、「でく」の字を取って領民からは「のぼう様」として慕われていた。他方「のぼう」は、成田家の殿様の従弟にあたり、父が成田家の城代を務めるなど主家の血筋でもあった。この「のぼう」が、ひょんなことから成田家武士500と領民2000ほどで忍城に籠り、石田三成率いる豊臣軍2万の軍勢と対決することになるのである。

「のぼう」を演じるのは能楽師の野村萬斎である。でくのぼうを演じるには少々良い男が過ぎたとも思えるが、「のぼう」が田楽踊りを舞うシーンはさすがである。

対する石田三成を演じるのは上地雄輔である。「のぼう」に比べて三成の人となりはあまり映画の中で描写されていない。それでも秀吉に憧れる少年の心を持った三成をうまく演じていたと思う。

この映画のポイントはまず、「のぼう」が2500の兵で豊臣軍2万の大軍と戦おうと決めたことである。理屈で考えると「のぼう」の負けは必至の状況であった。しかし、三成は降伏勧告で戦を回避できたの

に「のぼう」に対し戦をするよう挑発してしまう。このため「のぼう」は降伏することも考えていたが、「強者が弱者を力で押さえつける世の中は厭だ、だから戦う」と宣言し、豊臣軍と戦うことになるのである。すると、領民らの「のぼう」人気も相まって、忍城攻略戦の1日目は「のぼう」ら成田家の勝利となってしまう。そして映画の見せ場は三成による忍城の水攻めへと移っていくのである……。

はてさて物の規模は違うが現代の我々民事の争いでも、当事者間の人間関係の軋轢・悪化から訴訟へと発展していくケースがままある。私が映画を見て思ったのは、戦う（訴訟する）必要もないのに敢えて戦うという愚を犯すと、敗北という手痛いしっぺ返しを食らうこともあるということである。とりわけ当事者が理より情念を主として訴訟を決断した場合には、いずれの代理人になるにしても慎重にものごとを運ぶ必要があろう。挑発は当然行わないとしても、意図しないところで挑発だと誤解される可能性は常にある。そういう誤解を生じさせないために武士道や礼儀作法などが発達した面もあると考えられるのだが、いったい弁護士道や弁護士礼儀作法はあるのだろうか。

などと下らないことも考えることもできる「のぼうの城」である。本来は「のぼう」という新しいタイプのリーダー像を鑑賞する映画と思われるが、そこは「のぼう様」の懐の深さ故、笑って許してもらえそうである。